

特40

78.2

非  
語  
子  
道  
首  
  
平  
天



其角堂永機編輯  
小菴菴春湖校合

俳諧  
みな草

乾坤

晋子年一考俳句解

東京 求古探新書局刊

特40  
782

俳諧

みな草

このみな草は、みな草といふ  
は、俳諧の草といふ、何れも  
了らぬ。

その名は、ある草を、子と  
よ、呼ぶ、その草の名は、  
みな草といふ。



特40  
782

東  
山  
書  
院  
藏  
書  
印

新  
刊

志  
倉  
君  
お

しんがくをいひなせむしんがく  
しんがくをいひなせむしんがく  
しんがくをいひなせむしんがく  
しんがくをいひなせむしんがく  
しんがくをいひなせむしんがく

新  
刊

1  
1

東  
山  
書  
院  
藏  
書  
印

新  
刊  
志  
倉  
君  
お

しんがくをいひなせむしんがく  
しんがくをいひなせむしんがく  
しんがくをいひなせむしんがく  
しんがくをいひなせむしんがく  
しんがくをいひなせむしんがく



此書をけり集の類もさかぬる  
 先考りり遺稿ぬるしなむの  
 かみかきもくも我の  
 しんしんし摘ハ望雲而思の  
 よくもやあはるあはる  
 多の申子晋子翁の年考と  
 五十句の粗釋を我翁の

且ねるゝのりおはるゝ  
 俗歳の董ののののの  
 存きゝる何れホミ

おののの  
 何れ笑

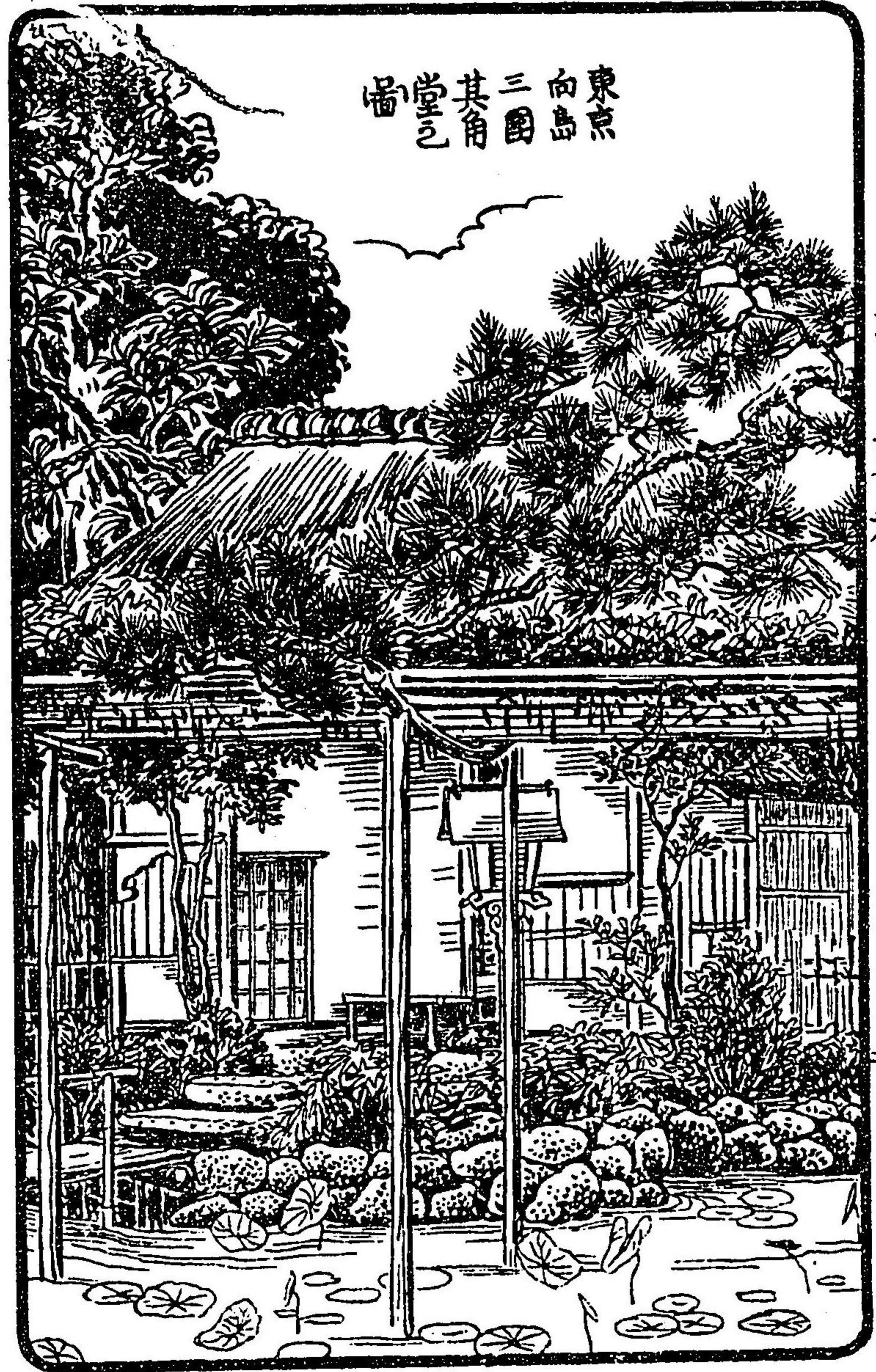
の俗歳の仲し

寶晋翁の

他  
 ののの



東京 向島 三國 其角 堂之 圖



東 園 集

東 園 集  
十一卷 四十四頁



東 園 集

十一



晋子  
六世  
螺窗  
居士  
肖像



晋子像  
其角堂永機編  
小築菴春湖校

俳諧  
み、な草一上 晋子年考

其角所螺窗翁遺稿

其角堂永機編  
小築菴春湖校

室晋初其角翁本姓竹也累代江別屋田の農者なり  
父八椽中東似号赤子元和八壬戌誣罵凌辱江所に住  
中多下野守のより俸禄を得て医也もつて業を以  
和歌連歌をよむも亦俳諧も有り由良正春の門を  
母八回別所某の女とて椽也似ち平のちの官を請て  
より十とせしめり礼を以てし其子ありて男也晋子也







是を好し一家の俳諧より同三卯十五歳 丹經  
素中易經素中を寫又蒲生五高孝淑等より何れもの  
の書の書写より同卯丙辰十六歳 國子草部司三越の  
講筵より出る匠らの名を以て書とよぶ儒ハ服部實言を以て  
學のて年講述より書其城木文山より後一家の所を  
阿の字 画ハ英一傑より

阿の字は画名暮子と云ふを以て草庵日記より  
ついでに只才叢書素中を寫すといふ名あり晋子の  
画をよぶ 勢別松坂を并け一所松梅の画道より晋子暮子  
双書トアリ

孫翁大巖和尚の詩を學びて今年易傳受りて

唱晉其角 易經上神下 晉上九 晉其角  
同五と十七歳 極骨九歌仙成り 同六戊午十八歳 菟合  
松尾五十句合化 是田舎句合なり 同七と茶 秋洪水 同  
八庚申九歳 次韻解潜阿り 是を信徳の七百五十韻  
對 二百五十員也

兩集の年号より九歌仙は延室八 次韻は延室九と云ふより傳り成り

同九年丙午十一歳 九月改元 天和元と成り 同二壬戌 芝  
金地院前より居を移して同三癸亥九三歳 河原の吟  
醫の阿の字 教訓生し



























夢のついでにさういふゆゑに  
 大なるもの細思ひありま  
 世の世の櫻の木の立の雑司谷  
 茶寮よりさういふ清のなま  
 山家して遊行の路のついでに  
 今産のついでにさういふ  
 夢の声 常ましく古戦場  
 石地よりさういふ雪のついでに  
 草履のついでにさういふ谷の  
 點の向を此井園にして置

夢のついでにさういふゆゑに  
 大なるもの細思ひありま  
 世の世の櫻の木の立の雑司谷  
 茶寮よりさういふ清のなま  
 山家して遊行の路のついでに  
 今産のついでにさういふ  
 夢の声 常ましく古戦場  
 石地よりさういふ雪のついでに  
 草履のついでにさういふ谷の  
 點の向を此井園にして置

野宮遺稿



立止りて浮房まみおちり小泉垣  
 河の邊まきし井へある露  
 物まきまきとのお所乃男まれ  
 おまきこまけに平仲う親  
 あつさうとやまらふハぬきあ  
 四度この仕着と服とてやまを  
 鄙人を罵してはどしらのまき  
 疾河のこまらふみくもし酔  
 風呂常一しりまきし月まき  
 紋のつらぬきしりまきの

芋の根ふちりまき地のまきねく  
 殺生石のまきあまきあ  
 当分の閑こまきまきまき  
 旅麻のまきあまきあまきあ  
 何れまきまき命の人も白の上  
 こまき僧都のまきまきの濱  
 ねまきけし鯨のまきまきのまき  
 牛のまきまきまきまきまき  
 湖まきまき二所まきまきのまきの色  
 山まきまきまきまきまきの白



此所二句持り成りし時ありきし由兄が縁續は  
つゝあはれなる下は句の口より多量給の切二首を秘蔵す  
まゆりて思ひし金言し茲に著書の二句をねん  
吟字二百五十年のころに五十一句の満めは  
徳弘ありき言つたし

酒のまゝ雨のぬき肌をひら

白よとらり哉行見り旅

佛檀を所化りたまふ時

二か一樓うらむ入あり

は〜〜かの道えぬ老の初見困友のこゝろ  
衰態のあり物なりとてP控の四十四の  
ありぬ。日五十一句のころに  
ゆきしを真れぬ神なり

十月のあまの七甲戌三十四一周の  
上京後足 甲戌のり河 東海道をやう掛川  
社重又雲石川より天龍下る京谷よりし  
御師福井後各御あまの止宿正の  
田九教をいれ 神保三輪を原存南都を  
多武峰を日二月堂に九なり

白ちとらりて重く  
心のはよこす小寒を結



磐石より高し〜

まゝの城の裏の〜

十夜二日高野の〜

卯塔のる居の〜

おれの浦より玉津島を〜

十日の夕浪華の〜

〜

止る翁も〜

〜

の力なる声の〜

通して佳音の〜

吹井より〜

三日申の〜

去桂の〜

糸を〜

日粟津義仲を〜

逗留する〜

已歌を〜

十月九日の〜











裏面

寶

文字大キテの番

晉

是より号宝晋科

吟

元禄九丙子十月深川長慶寺公翁の墓を修す

時を以てやこゝの舟政を慕ふ

専吟法徳境する四世の翁仙何り 回十丁を三十七歳

四り娘をよす<sup>各</sup>とらふ

祝産育

とあしなひの皮は<sup>二</sup>腸の緒つこころ

くらしを<sup>三</sup>二<sup>三</sup>撰て綿繡段<sup>四</sup> 我の典上貞

び<sup>五</sup>と娘を<sup>六</sup>の縁舎<sup>七</sup>つかり<sup>八</sup>く翁の<sup>九</sup>何の<sup>十</sup>を<sup>十一</sup>とらふ

書<sup>十二</sup>何<sup>十三</sup>つと<sup>十四</sup>を<sup>十五</sup>庵<sup>十六</sup>つ<sup>十七</sup>け<sup>十八</sup>ふ十二月<sup>十九</sup>帰<sup>二十</sup>京<sup>二十一</sup>何<sup>二十二</sup>り<sup>二十三</sup>

成<sup>二十四</sup>寅<sup>二十五</sup>三十八<sup>二十六</sup>歳<sup>二十七</sup>六<sup>二十八</sup>日<sup>二十九</sup>直<sup>三十</sup>港<sup>三十一</sup>つ<sup>三十二</sup>店<sup>三十三</sup>を<sup>三十四</sup>移<sup>三十五</sup>す<sup>三十六</sup>芝<sup>三十七</sup>田<sup>三十八</sup>早

五<sup>三十九</sup>丁目<sup>四十</sup>海<sup>四十一</sup>側<sup>四十二</sup>の<sup>四十三</sup>住<sup>四十四</sup>居<sup>四十五</sup>し<sup>四十六</sup>有<sup>四十七</sup>竹<sup>四十八</sup>居<sup>四十九</sup>文<sup>五十</sup>合<sup>五十一</sup>庵<sup>五十二</sup>の<sup>五十三</sup>号<sup>五十四</sup>なり

竹三草をいふつげいふふ<sup>五十五</sup>

ふ<sup>五十六</sup>と<sup>五十七</sup>あ<sup>五十八</sup>り<sup>五十九</sup>い<sup>六十</sup>ふ<sup>六十一</sup>者<sup>六十二</sup>何<sup>六十三</sup>り

竹の<sup>六十四</sup>際<sup>六十五</sup>を<sup>六十六</sup>い<sup>六十七</sup>ら<sup>六十八</sup>ふ<sup>六十九</sup>縁<sup>七十</sup>の<sup>七十一</sup>時<sup>七十二</sup>何<sup>七十三</sup>り

涼<sup>七十四</sup>鬼<sup>七十五</sup>ひ<sup>七十六</sup>ゆ<sup>七十七</sup>く<sup>七十八</sup>腸<sup>七十九</sup>を<sup>八十</sup>い<sup>八十一</sup>て<sup>八十二</sup>

和歌集

和歌集



泊〜船。家のあり〜と  
か〜

ぬほ〜

同年十二月十日草庵祝部の怒りかゝり、貞享甲子のまじり首〜日記〜こと〜  
築〜  
池魚の災り〜  
浮〜  
同十二日卯三十九歳入

〜

おぼ〜

雪のあふ〜

同十三日卯の〜  
薬師堂の〜

七〜

同十四日卯〜

武蔵建書



都文公より八去屋産し二千石を所ししを在田向院表  
 吉良のときよりやきり  
 嵐雪村ゆき晋子ししは夜海家吉良の屋おへ  
 赤穂の浪士押よも吉主の逆眼を果とししとさく其國に  
 粟門して大言源吉ひやーを述べ子葉ぬは其國  
 幸多しやう生涯の名跡對面口してひみよとーと  
 ちよハ熟る吉良家(志)のら入いともき  
 我雪をかろくハ煙ーは立り上  
 月と雪のわーハ命の指ととら  
 極月六日と羽文鱗への文通せり海帯りしし回す  
 葉菜四十三葉の末す子をまーる名みり

夢子をたかやまの白い

夢帯し卯卯の暇をまうら  
 同年十月十四日江戸大地震  
こーち  
 辰國流火とらつて  
 妹らよや薑とけけく解の音  
 宝永元甲申四十四三の政元と逢歌榊子と逢るナレ  
 丁亥の遊者のたを思ひくひんお上本と  
 夏のおどろ心解しして草庵の裁と逢る  
 病り三年 宿甲別業を好し  
 栲利の串海氣とらや白の友



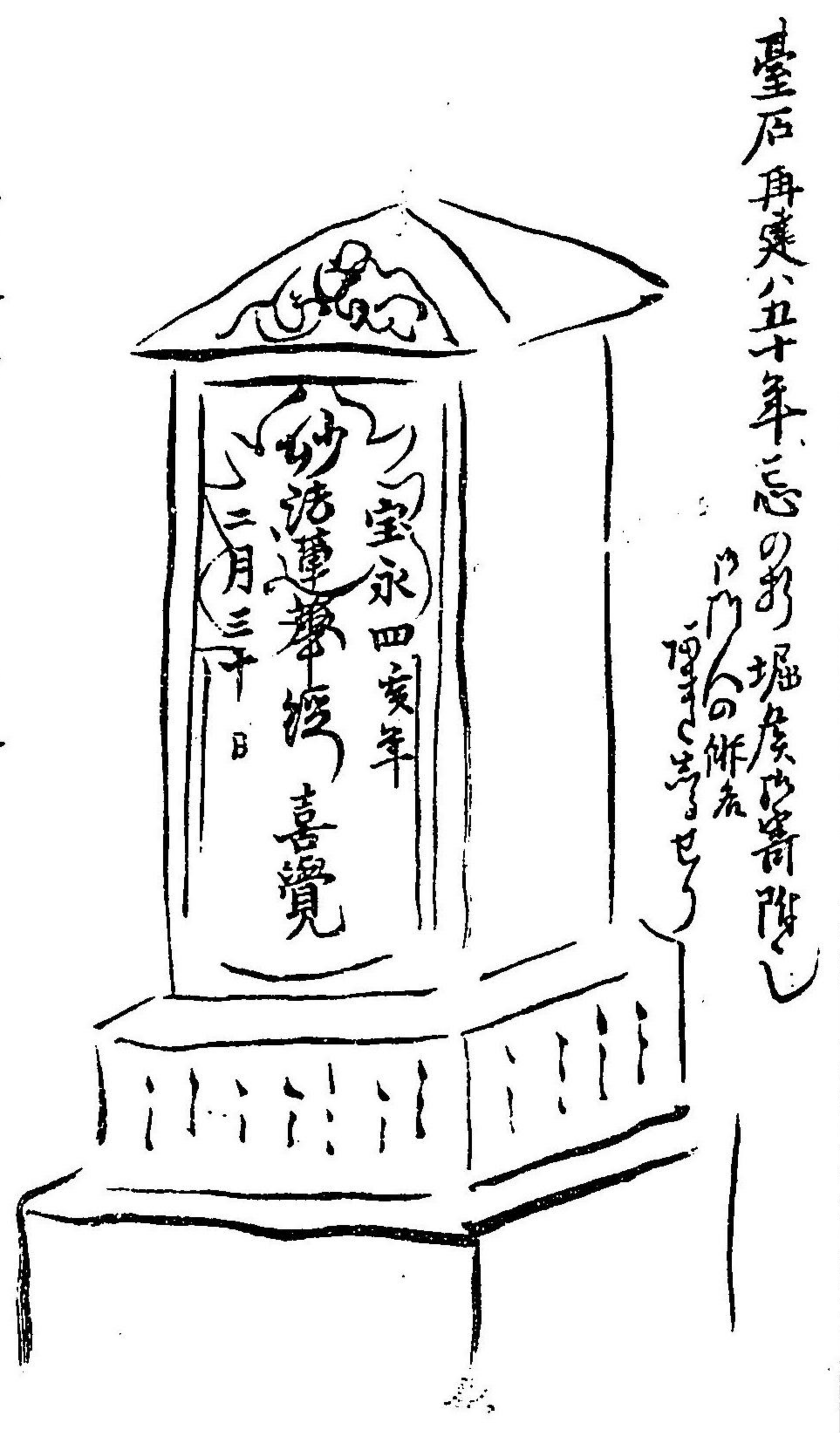




嗚呼生者の口を閉じしは我死ハ甚稀神を以て酒の  
むらぬか致の回りのことしと思儀なるれその時  
阿る誠知死期の大禱機と仰りぬまに三月二  
亡骸ハ二市樓上行き、細の東江店其の墓と云ふ

今東都小田原町に室井吉五郎といふ。尚敬は  
是晋子の血脉也

西居其の墓並の  
墓ありて室井と号  
室井の井あり



墓所全圖ハ江戸名所番給  
かき

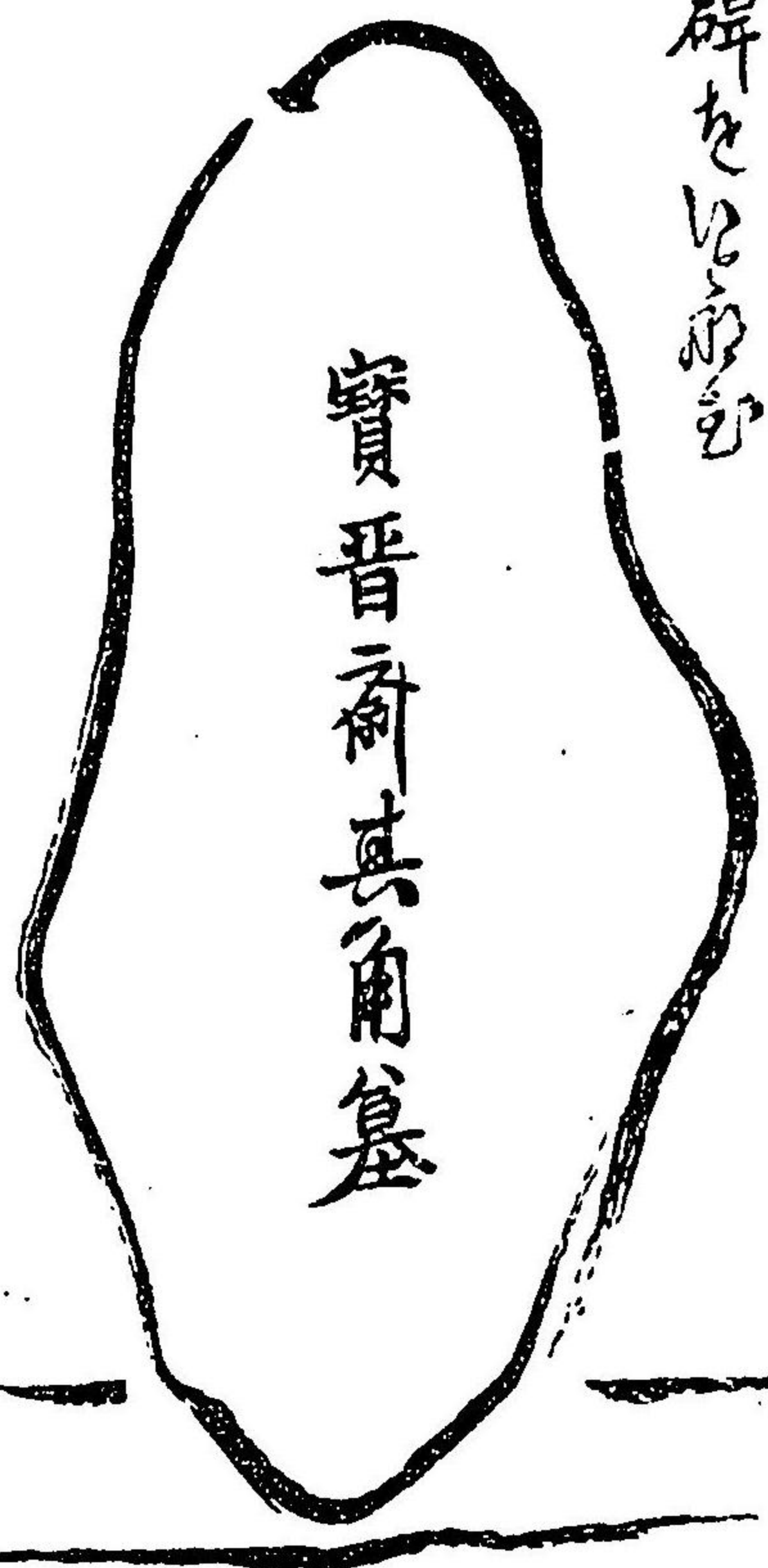


晋子病中、無眠の儘上の像一室を  
書けり、廓然不動の因縁、如く清流嵐雪  
松風、法阿おをこゝの知友、心へおあて、深川も夢寄



芭蕉公翁の塚、隣りひつり玉腰頭を築き、此佳城の下、  
砌へ墓碑をいおむ

裏面



室永四丁亥年二月三十日 知友門人建 伏文山書

彼翁の心も風うしよき、の境へ此の氣を感へ九句めた







春暖坐御炉

久遠の暖窓を〜まら〜に  
 寛の燈火輝みあがり  
 若草の普澄の所流りやん  
 浅黄のつり白のこぼれ  
 存心鐘のひらり指し取しき  
 風のうけこむ留の音よみ

其角  
 青流  
 角  
 風

雁のりちあめり〜立〜  
 目出ま〜し〜刺〜  
 こ〜の又〜あ〜九条  
 雨〜降〜と〜の星  
 若〜は〜は〜の  
 息〜〜〜  
 通〜の譯〜  
 野〜の  
 糸〜の  
 色〜の

角  
 流  
 角  
 螺  
 角  
 角  
 角  
 角  
 角



歌集

あふとておれ風あふりて夜盛

角

扇の芝の画をすまはる草

角

買の雛子一やうくもてけり

角

たはさ

言ぬ遠田

角

河津の橋をいふとけり

角

歌集

揚枝をさしし持たす

角

くもてけりあふりて

角

えは

旅の宿の魚

角

春のさけ馬を啼かす

角

えは

月圓の聲

角

此軍部の海をけりて

角

歌集

葺かぬ破総

角

舟の舟を越すの面を

角

白

秋

角

高霜の由舎の角田川

角

えは

子母のゆかり

角

鳥帽子

角

や

花の露をさすけりて

角

花の露をさすけりて

角

汗を流す

角



晉子居的編輯目錄

甲合句令

三系一東

蠹集

新山泉

讀水界

花下

以香昔

雅淡集

秋の

竹尾花

句見亦

若也合

裏の

錦繡後

三上吟

集尾書

の

新三百頁

新三百頁

亦

文達集 綴系 皮篋摺 夢破三百頁

没存摺

紫林子 五元集 續五元集

楷作

子居字上紙

6



東 京 圖 書 館

新 門 四 一 函

七 部 三 架

類 號



特40

782

087384-001-1

特40-782

俳諧みゝな草

老鼠肝 螺窓/著

上

M14

DBE-0713

